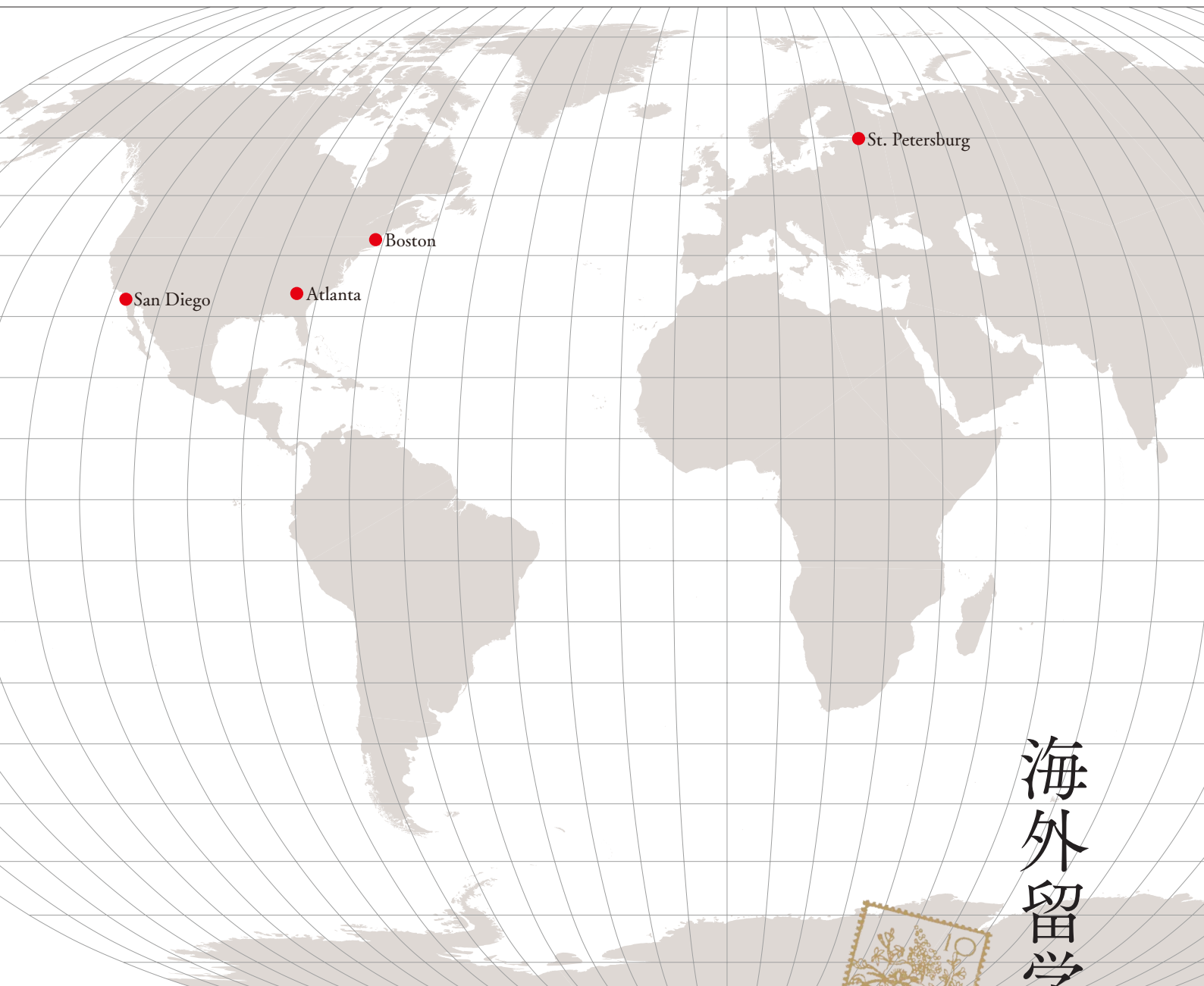




海外留学便り

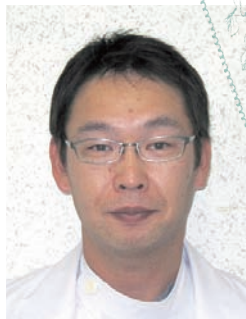
- | | |
|-------|--------------------------------------|
| 出村 諭 | カリフォルニア大学サンディエゴ校
チルドレンズホスピタルへ留学して |
| 松原 秀憲 | ボストン留学記 |
| 吉岡 克人 | Emory 大学留学記 |
| 高田 宗知 | サンクトペテルブルグ留学記 |



Department of Orthopaedic Surgery
Graduate School of Medical Science
Kanazawa University

カリフォルニア大学サンディエゴ校 チルドレンズホスピタルへ留学して

USA
San Diego



出村 諭

(平成7年入局)

平成22年7月より9ヶ月間、留学の機会を頂き、アメリカ合衆国の西海岸カリフォルニア大学サンディエゴ校(University of California, San Diego, UCSD)、およびレディー、チルドレンズホスピタル(Rady Children's Hospital)にて、側彎症の臨床研究をさせて頂きました。貴重な機会を頂き、同門の先生方に感謝申し上げます。

カリフォルニア大学はカリフォルニア州内に10のキャンパスを持つ州立大学です。その1つであるカリフォルニア大学サンディエゴ校は、学生数が2万人、教員数も1000人を超える超マンモス校です。大学のキャンパスも広大で、メインキャンパス以外にもサンディエゴ市内の至る所に関連施設があります。医学部はメインキャンパス内にありますが、主要病院が数箇所に分かれており、レディーチルドレンズホスピタルもその一つです。

私が主に研究をさせていただいたレディーチルドレンズホスピタルですが、その名の通り、小児医療に特化した病院です。病床数は261床、手術室数も15室あり、小児専門のほぼ全ての科が存在しています。整形外科のスタッフDrは10人で、フェロー（医員）の先生やレジデント(研修医)の先生を合わせると20人を数えます。また、アメリカはなんでもランキングを付けるのが好きらしく、全米に200以上ある小児専門病院のうち、昨年度のこの病院ランキングは

Top10に入っており、整形外科に関しては、全米で4位という評価の高さだそうです。あるフェロー（医員）の先生にお聞きしたところ、ここの医員の応募は毎年50人近くいて、実際の採用人数は4人なので、狭き門だと言っていました。

まずこちらの病院に来て印象的だったことは、開始時間の早さです。整形外科に関しても、術前、術後カンファレンス、抄読会は全て早朝に行われ、週3日は6時半から始まります。私も朝5時過ぎに起きて、家を出るという生活が始まり、

今までの夜型生活から完全な朝型生活に変わりました。カンファレンスのない日でも、手術は朝の7時から始まり、次々と手術が進んでいきます。私がこちらに来る前は、アメリカの病院は朝が早いけど、夜



病院正面

も終わるのが早いという印象を持っていましたが、そんなことはありませんでした。この施設はサンディエゴ近郊を含む、ほぼ全ての重症小児患者が来院するため、患者数は非常に多く、特に救急室(ER)は大変なことになっています。そして救急といえば当然整形外科の出番であり、通常の診療に加え救急患者の対応も含め、先生方は日夜問わず忙しそうに働いておられました。

私がサンディエゴに着いたのは7月の初めでしたが、私の第1印象は“結構寒い”でした。どこで調べても、誰に話を聞いても、“サンディエゴは気候も1年中穏やかで、暖かいし雨も降らない”という答えしか帰って来ません。しかし今年に関しては全く当てはまりませんでした。日本では記録的な猛暑だったようですが、アメリカ西海岸は記録的な冷夏でした。夏らしい暑さは、8月のお盆過ぎの1週間のみでした。

生活の立ち上げに関しては、金大整形医局で留学されていた琉球大学の當銘保則先生がサンディエゴで留学をされており、手伝っていただいたお陰でとてもスムーズにいきました。また腫瘍班の木村浩明先生も6月までおられ、ちょうど入れ替わりのような形で引継ぎも出来たため、自分は幸運だったと思います。

しかし、スムーズに行ったこともあれば、やはりというかトラブルも幾つかありました。こちらで生活する上で、車にまつわるトラブルを出来るだけ避けたかったので、トヨタのディーラーで車を買うことにしました。拙い英語ながらも何とか交渉して、7万マイル（10万キロ）走行した中古車を購入しました。日本では10万キロだとほとんど査定がつきませんが、こちらでは低走行車に分類されるそうです。20万キロ以上走行した車も、普通に売られていました。“ディーラーで買ったし、まあ大丈夫やろ”と、たかをくくっていたのですが、車を使い始めてスペアキーでエンジンをかけようとしたときのことです。エンジンがかからないので仕方が無く再びディーラーに行き、確認してもらったところ、“これはクライスラーの鍵だね”と衝撃の一言が…スペアキーが必要なので持って来て欲しいと伝えと、“今日は担当者がいなくて分からないので今度出直してきてくれ”とのセールスマンからの冷たい言葉。一旦帰りかけましたが納得がいかなかったため、“上司と話をさせてくれ”と再び頼むと、その日にあっさりとスペアキーを作ってくれました。日本の常識が通用しないことを認識した瞬間で、その後用心深く確認をするようになり、しつこく物を頼むようになったのは言うまでもありません。

さて、こちらでの研究内容ですが、私は特発性側彎症に関する臨床研究をさせていただきました。そのなかの一つは新しい椎弓根スクリューを使用した側彎症手術の治療成績に関してです。以前の側彎症の手術では脊椎用フックやワイヤーを使って変形矯正が行われていましたが、ここ10年の間で積極的に椎弓根スクリューを使用して矯正を行うようになってきました。この矯正により、中程度までの変形であれば、70%を超える側弯矯正が可能となりました。その一方で術後に胸椎の生理的後弯が減少するという問題も



手術室での風景（左から手術室看護師さん、Newton先生、麻酔科 Dr、医員の先生、私）

残っていました。また椎弓根スクリューも最近までは“ポリアキシアルスクリュー”と呼ばれる、スクリューヘッドが全ての方向に回転するスクリューと、“モノアキシアルスクリュー”と呼ばれる、スクリューヘッドが動かないスクリューの2種類のみでしたが、最近一方向にのみスクリューヘッドが動く“ユニプラナースクリュー”という変形矯正に有利と考えられるスクリューが開発されました。その開発に携わり、側彎症でいち早く使用を始められたのが留学先のボスである、Peter Newton先生です。この新しいスクリューを使用した手術成績を検討した結果、側弯の良好な矯正に加え、胸椎生理的後弯の維持、そしてさらに回旋の矯正も得られる結果となり、論文作成させて頂きました。

Newton先生はこのような手技を用いて、年間150件程度の側彎症手術を行っています。側彎症の手術といえば、朝から晩までの1日中の長時間手術を想像しますが、こちらでは胸椎カーブの中程度の側弯矯正だと2時間台の手術で終わることもあり、私にとっては信じがたい速さで手術が行われていました。また私にとってありがたかったことは、手洗いをして手術に参加させて頂けたことです。米国では多くの場合、手洗いでの参加は難しいといわれていますが、この施設に関しては一定の事務手続きが済めば手洗いでの参加させてもらうことが可能です。間近で見ることにより、細かな手技やピットフォールも理解することができ、貴重な経験をさせていただきました。その他にもNewton先生はアメリカ国内外の側彎症を専門にされている先生方の多施設でのデータベースも取りまとめられている先生の一人です。そのデータベースから、数百例に及ぶ側彎症患者さんの手術後の呼吸機能の関連や体幹バランスについての検討もさせていただきました。

最後に、このようなすばらしい機会を与えてくださった富田名誉教授、土屋教授、川原特任教授、村上准教授をはじめ、快く送り出してくださった脊椎グループの先生方、教室員の先生方、同門の諸先生方に心からお礼を申し上げ、留学記を終えたいと思います。

ボストン留学記

USA
Boston



松原 秀憲

(平成11年入局)



私は平成21年4月から平成23年3月までの2年間、アメリカ東海岸、マサチューセッツ州ボストンにいますBoston university, Orthopaedics Research Laboratoryに留学させていただきました。ここでは骨折、骨延長、骨粗鬆症などの骨再生の研究に従事することができました。昨年に引き続き、貴重な経験・留学について思う事を報告させていただきます。

■ボストン

私の留学していたボストンは、アメリカ北東部にあるマサチューセッツ州の州都で、アメリカでもっとも歴史の古い都市として知られています。ボストンには、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学(MIT)に代表される100を超える単科・総合大学があり、まさに学生の街であります。またボストン交響楽団、ボストン美術館などに代表される芸術分野も充実しており、アメリカ4大プロスポーツチームも有し、様々な娯楽があります。

留学中、アメリカ国内を何度か旅行させていただきましたが、ボストンはその中でも1番のお気に入りの都市でした。街の雰囲気もさることながら、スポーツの盛り上がりは異常に熱狂しており一体感がありますし、その一方、音楽・美術・演劇などの芸術もたくさんあります。四季が日本以上にははっきりしており、春は至るところで花が咲き乱れ、5月には木々、芝生が緑々しく美しく、6月には初夏の陽気、もちろん梅雨はありません。7-9月の夏も爽やかで過ごしやすく、日も長く、秋は紅葉が非常に美しく、冬は金沢よりも気温が寒いですが、雪はそれほどでもなく降ってもすぐ除雪されます。家の中はセントラルヒーティングで冬でも半袖で過ごせます。外にでると寒いというよりは冷たい・痛いという感じで冬の厳しさを感じますが、これも次来る春の喜びをより一層引き立ててくれるようです。学問においても有名大学・病院がたくさんありますので、私と同じような境遇で留学に来ている日本人・外国人がたくさんいます。同じ志をもった人たちとも切磋琢磨でいい所です。

■研究について

私は、ここで骨再生の研究をさせていただきました。具体的には1. 炭疽菌抗体を用いた骨粗鬆症治療について、2.骨新生と血管新生の関係についての実験、を昨年に引き続き行ってきました。1の実験については、昨年も紹介させていただきましたが、ある種の炭疽菌抗体を使った骨粗鬆症治療です。骨新生を促すと同時に骨破壊を抑制するというこれまでにはない薬の可能性が期待されましたが、in vivo

での実験では残念ながら結果が出ず、モデル・薬の量などを見直し、次の人に引き継がれる形となりました。結果はでませんでした。骨代謝研究の奥深さ楽しさを知ることができ、また骨粗鬆症実験のアプローチを学ぶ事ができたので大変有意義な実験でした。2の実験については、骨新生において血管新生がどのようにかかわっているのかということ、骨延長モデルを用いて調べました。われわれ整形外科医は日々、臨床において、骨折治癒・骨新生に血流がなんとなく大事だということを感じているかと思いますが、なぜなのか?どのように?ということ、強力な血管新生と骨新生が同時に観察できる骨延長モデルを用いて調べました。血管は、酸素や栄養・細胞を運ぶ器官であるため、組織新生には重要であることは容易に予想されるのですが、私の実験では、血管が物を運ぶという役割だけでなく、血管内皮細胞そのものが様々な成長因子を産生し骨再生を促しているという結論に至りました。具体的には血管内皮細胞がBMP2を産生し、それが骨新生を促し、骨に分化するよう促された幹細胞が、血管新生を促す成長因子を産生し血管再生を促します。このように、血管と骨はお互いをparacrine作用によって刺激し合いcoworkして最終的な骨形成に至る、という結果が得られました。今後は臨床にいかに応用していけるかという事を考え、日本に帰っても実験を続けていけたらと思います。留学期間ぎりぎり、なんとか論文を投稿して帰国に至りましたが、帰国後良い知らせが届く事を願っております。

■研究室について

私の研究室はBoston University Orthopaedics Research Laboratoryというところで、ボスは骨再生の分野で有名です。2年前までは、約20人が在籍する大所帯だったようですが、昨今のアメリカの不景気でGrantが得られず、研究室も縮小傾向となり、私が帰国する際には4人の研究室となりました。研究室はPhD.のDr.Gerstenfeld (MDではない)という教授が研究室を運営していました。明らかに研究室は縮小傾向で金欠でした。研究室からの論文はまずまず出ておりましたが、それでもGrantが取れないそうです。こんな事がありました。ある日、大ボスのDr.Einhornに呼び出され、「ほんとに申し訳ないが、うちの研究室はお金が底をつきそうなので、あなたには実験はもうさせてあげられない。大学院生もいるし、彼らをなんとか卒業させなければいけない。研究室の教授の給料も払わなければいけない。」と言われ、私の実験は、この時点では5,6割でしたが、中断せざるを得ませんでした。研究室のスペースもお金がなく半分になり(大学に場所代を払うという形なので)、とって代わって、隣の資金潤沢な肺グループが占拠していききました。私自身もどうすればよいのか路頭に迷いましたが、大学院生や医学生の実験を手伝ったり教えてもらったり、余った実験道具で追加の実験をこっそりしたりと苦労しました。アメリカでの友人の多くもアメリカの研究室の昨今の金銭事情を嘆いていました。液体窒素タンクを最後の一滴まで使いきる研究室や、つぶれた研究室からワゴンで実験物品を取りにいって研究室などあると聞きました。アメリカの研究室は会社と同じです。お金があるところは、実験できる→論文が書ける→お金がもらえる→人がもっと雇える、良い道具・機械が買える→論文がもっとかける→もっとお金がもらえる→もっとたくさん実験ができるといったように良いサイクルとなりますが、どこかでつまずくと実験できなくなるだけでなく、無給となり研究室自体がつぶれます。会社でいうところの倒産となります。アメリカに来て、金沢大学の医局で不自由なく

実験できる環境のありがたみを、ひしひしと感じました。これも一重に医局・同門の皆さまのお陰だと思っております。私の帰国4カ月前に、比較的大きなGrantがとれ、研究室のボスもこれから復活だと意気込んでいました。自分が留学したところがなくなるかと危惧しましたが、ぜひ復活してもらいたいと思います。

■留学について

留学前は、留学とは日本から遠く離れた地に来て右も左も分からず、色々と大変といった印象でしたが、生活面においては20-30年前に海外留学された先生とは比べものにならないくらい楽になったと思います。20-30年前は日本と連絡しようと思っても、手紙を書き2週間後に日本に到着、電話をしようと思っても、電話代が高く頻回には電話できず、音も遠く、どこかに行こうと思っても、地図を広げ、場所・道順を確認。

現在では、メールや無料ビデオ電話のスカイプ、車のカーナビ、インターネットで日本のテレビ・本を見る事ができたりと、物理的な距離はあってもあまり感じません。先人の先生方の留学は、まさに戦地にでも向かうかのようなだったと聞きますが、今ではちょっと旅行に行ってくるという感覚になったのではないのでしょうか。これには、もちろん良い点・悪い点あるかと思いますが、せっかく身近になった海外ですので、若い先生には、これからもっと世界に羽ばたき見聞を広げていってもらえたらと思います。昨今、日本人の海外離れが言われておりますが、非常に残念な事だと感じております。日本の文化・伝統を守るのも大切ですが、他の文化を見る、また外から日本の文化を見つめ直すことにより、さらに世界が広がると思います。

ノーベル化学賞の根岸教授も「若者よ、海外に出よ。たとえ海外で成功しなくとも、一定期間、日本を外側からみるという体験は、何にもまして重要なはず」とおっしゃっていました。まったく同感です。

最後に、このような大変貴重な機会を与えていただきました富田名誉教授、土屋教授、同門の先生方、そして家族に心より感謝致します。これからは、この経験を生かし、新生、足・骨再建班で頑張りたいと思います。これからも宜しくお願い致します。



大ボス Dr. Einhorn と

中ボス Dr. Gerstenfeld と



吉岡 克人

(平成13年入局)

「How old are you?」「I'm thirteen!」アメリカから手術見学に来た医師と話し、苦笑されたのは30歳の夏のことでした。こんな私にも留学のチャンスが訪れ、2010年4月より、アメリカのジョージア州アトランタにある Emory Universityに留学し、Prof.Bodenの研究室に所属しています。Emory Universityには鳥畠先生、村上先生、赤丸先生、加藤先生が今まで留学されており、金沢大学とは良好な関係が続いています。

アトランタは、コカコーラ、CNN、デルタ航空の本社がある南部最大の商業都市ですが、私はなによりも黒人の多さに驚きました。南部に行くほどそれは顕著であり、正直最初はパーカーのフードを被った黒人を見ると、失礼ではありますが恐かったです。またファーストフードには黒人の割合が多く、立派なレストランには白人が多い現実を見ると、教育、経済の格差が依然大きいことが感じられます。実際に住んでみると居心地は良く、アパート付近の治安も良いため、天気の良い日は病院まで40～50分かけて歩いて通勤することも多いです。そして、もう一つ驚いたのは夏の暑さです。アトランタは別名ホットランタと言われるほど暑く、日中は散歩に出かけるのも決死の覚悟、といったほどでした。私が所属しているサッカーリーグでは、朝9時からの試合にも関わらず、猛暑のため数名熱射病にかかりました。その地元の草サッカーチームですが、さすが人種のるつぼだけあって多国籍であり、中米、ブラジル、メキシコ、トルコ、韓国、日本などのチームで構成されワールドカップさながらのリーグ戦を行っています。「ビール腹にも関わらず、どうしてこんなに筋肉ムキムキなんだろう?」と体格差に愕然としながらも楽しんでます。また、ロシア語しか話せない元ロシア代表(現在無職で車もなし)や、還暦前の元チリ代表、こちらに永住している元Jリーガーなど、第2の人生をアメリカで過ごしている人とも一緒にプレーをし、やっぱりアメリカには夢があるのかな、などと勝手に思っています。

さて、実験に関してですが、ボスであるProf.Bodenは骨形成タンパク質(rhBMP- 2)の大家として活躍しています。rhBMP- 2は骨癒合促進目的に2002年からアメリカで臨床使用されており、今では年間8億ドル以上の売り上げを記録しているそうです。高価なBMP- 2使用を抑えるため、この作用を促進させる物質を探し出すことを続けており、加藤先生に引き続き私もこの研究に携わっています。研究室のメンバーはとても親切で、細胞培養?アッセイ?と素人同然の私に、基礎実験のいろはから根気よく教えてくれました。BMP- 2の作用を促進させる可能性があるかとわかれれば、すぐに動物実験を行い、形成される骨量や骨質を確認し、さらに平行して組織への毒性も調べます。関わっているそれぞれのメンバーは、新しい発見が

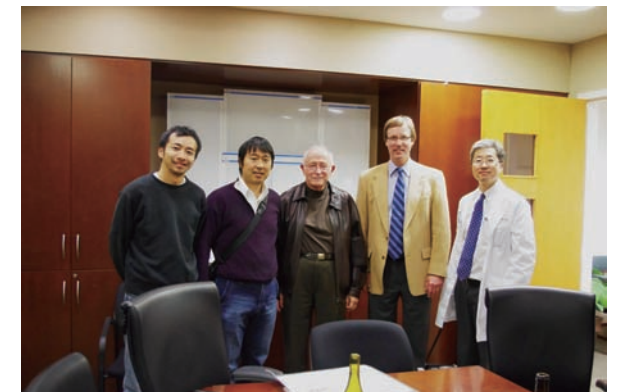
あると科学者としての興味を示すのですが、研究室としてはあくまでも商品化できる化合物を見つけることに重きを置いているのが、月1回のカンファレンスで示されて興味深いです。しかしBMP- 2の作用を促進させるLMP- 1というタンパクをこの研究室で発見して15年近くが経ちますが、未だ商品化できる類似化合物を探し続けています。基礎研究を続けるには、強い気持ち、優秀なスタッフ、そして豊富な資金が必要だということを感じます。私にとって、細胞培養をし、選んだ化合物が骨をより多く作るかどうかに一喜一憂する生活は、臨床医としての今までの自分が全く役に立たないことに気付かされます。ただ、こういった研究に人生を捧げて没頭している人達と一緒に仕事ができるのは、とても貴重な経験だと感じています。

また、初代教授Whitesideを囲んでの月1回のカンファレンスが楽しみのひとつになっています。ワインやウイスキーを飲みながら、「MRIもpedicle screwもない時代だが、この症例をどう治療する?」とSpine fellowに質問していきます。含蓄のある話が聞け、40年前にここまでの手術をしていたのか、と感動すら覚えます。

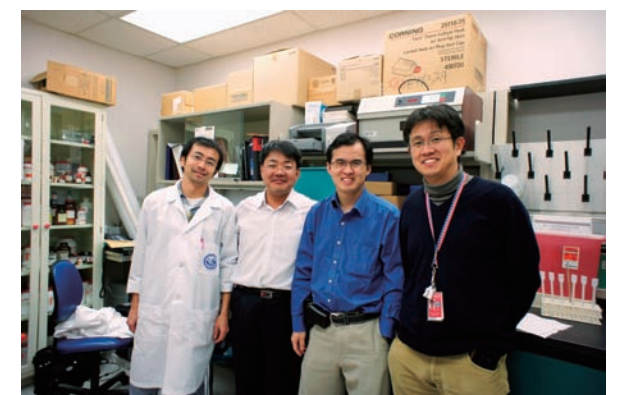
残された期間、家族と過ごす時間を大切に、研究にもさらに精進したいと考えています。最後になりましたが、留学に際し御尽力を頂いた教室の先生方並びに同門の先生方にこの場をお借りし、心より感謝申し上げます。



オリンピック公園。近代オリンピック提唱者のクーベルタン男爵の像と。



Whiteside 初代教授を囲んでのカンファレンス
左から筆者、大木先生(結城病院)、
Dr. Whiteside、Dr.Heller、Dr. Yoon



同じ研究室の International fellow と。
右端は和歌山県立医科大学の延興先生



高田 宗知

(平成 14 年入局)

まず、この原稿を書いている現在(3 月中旬)、大震災で日本は大変な被害を被っています。インターネットで悲惨なニュースを見るにつけ、もどかしい思いばかりが募ります。遠くロシアから日本の復興を祈念しております。

2010年11月から1年間の予定で、ロシアの(サンクト)ペテルブルグにある Vreden Russian Research Institute of Traumatology and Orthopedicsに留学させていただいています。創外固定の分野において第一線で活躍されているLeonid N. Solomin教授の指導のもと、研修に勤しむ毎日です。ロシアといえば骨延長術を開発したGavriil A. Ilizarov教授、およびクルガンにあるRussian Ilizarov Scientific Centreが有名です。しかし今回は、土屋教授がVreden Instituteで講演されたことなどをきっかけに、ペテルブルグに留学することをすすめていただきました。

ペテルブルグは1703年に創建され、ロマノフ王朝の栄華、ナポレオンとの戦い、ロシア革命、ナチス・ドイツとの戦いなど短い間に様々な歴史を経験してきました。現在もモスクワに次ぐロシア第二の都市であり、約450万人の人口を有する大都市です。しかし近年、トヨタや日産の工場が建設されていますが、日本人は約200名しか在住していません。日本とロシアの付き合いの薄さが分かります。

統計によると、日本人の8割は「ロシアに親しみを感ぜない」そうです。これは、北方領土問題などのニュースを見ていると納得できる数字です。しかし、実は反対にロシア人は日本が大好きです。街中には寿司レストランがあふれ、医局ではTOSHIBAのノートパソコンが、街では多くの日本車を見かけます。オリエンタルな魅力のみならず、極東の小国がいかに強大な国力をつけたか(日本のGDPはロシアの4倍以上です)についてロシア人が興味をいだいているようです。ロシアが日本に片思いをしている状態だと言えます。

■フェローシップ

2009年、当時准教授だった土屋先生から『日露若手研究者フェローシップ』の奨学金について教えていただきました。松原秀憲先生から御指導いただき申請書を作成し、一次は通ったのですが、二次の面接と小論文であっけなく落とされてしまいました。完全な準備不足でした。

2010年、再びチャンスをいただきました。わざわざ霞が関(外務省)に行ってまで同じ失敗を繰り返したくなかったので、図書館からロシア関係の本を何冊も借りてきて勉強を始めました。すると、成熟したロシアの国民性が見えてきました。共産主義時代の恩恵で国民の文盲率はゼロに近く、制限された報道内容からもしっかりと政治の内容を国民が理解しているようです。冷戦時代は科学力でアメリカと伍していた

国です。人工衛星「スプートニク」も、有人宇宙飛行士の「ガガーリン」もいずれも世界初です。振り返れば、日本もすばらしい国ですが、政治のニュースだけ見ていると「こんな体たらくでよいのか」と憤りを感じることも多々あります。ロシアにもそんな政治のイメージと、市民の実像に隔たりがあるのでしょう。

試験対策としてNews Weekのバックナンバーで時事問題を調べ、小論文の書き方も訓練し、今回は無事通過することができました。『日露青年交流センター』のホームページにある「派遣者リスト」を見ると、私以外は皆「ロシアの専門家」のようです。ロシア語も話せない人間を派遣することには面接官も逡巡があったかと思います。このフェローシップの目的は「ロシアとの関係発展の人材を育成する」ことです。(不謹慎ですが、北方領土問題があるために奨学金を出してくれると言えます。)日本人を代表しているという気持ちを忘れず、研修を通じてロシア人と良好な交流を行うよう日々心掛けています。

■Vreden Institute

「ロシアの医療から学ぶことがあるのか?」とは、皆さんから(ロシア人からさえも)よく質問されることで、正直言うと私も行くまでは若干の不安がありました。しかし、実際にここで研修を始めると良い意味で裏切られたことを実感しました。

Vreden Instituteは「ロシア整形外科の父」と言われるRoman R. Vredenによって1906年に開設されました。ベッド数は830床、擁する手術室は20室という整形外科単科の病院としては世界でも有数の規模で、整形外科医は200名以上、麻酔科医約20名、他、内科医数名で構成されています。全部で21のグループに分かれており、中でも関節班は9つもあり、TKAやTHAはロシアで最も多く施行されているそうです。また、大学院生が研究を行い、学位を取得しています。日本でいうと「整形外科だけの大学病院」のような感じです。

創外固定班には教授以下スタッフが3名、大学院生が4名、研修医数名が在籍しています。週に3〜5件の創外固定の手術があり、骨折後の偽関節や変形治癒、先天疾患、関節近傍骨折、足部の変形

など、下肢のみならず上肢の手術も行われます。手術ではアシスタントとしてよく手洗いをさせられます。始めのころは勝手が分らず、もたもたとして叱られることもありましたが、今では器具の扱いにも慣れ、「ずっとここで研修するように」とおだてられています。Solomin教授の手術はSpeedyで、周りのスタッフを怒鳴り、急かし、それでいてジョークが飛び交い皆で笑いながら手術が行われます。

創外固定班では独自のヘキサポッド創外固定器(Ortho-SUV frame)を開発、臨床応用しています。クルガンからもドクター達が研修にきていましたが、なかなかのすぐれものです。私のような外国人が長期留学に来るのは初めてですが(そのためビザの手続きでは大変苦勞させられました)、研修コースは確立されており、ほぼマンツーマンで教えてくれます。イリザロフ法の基本から、それを



ハンズオンのあと、
Solomin 教授と記念撮影。

発展させたCombined External Fixationという考え方、ピンサイトの感染や拘縮を防止するための新しい解剖学的考察など、系統立てられたレクチャーはとてもためになります。頭が整理されると新しい発想も出てきます。

「この施設に来られた」ことが大変良かったと実感する毎日です。

■ロシアの生活

着いてすぐ、領事館で安全についてのブリーフィングを受けました。強盗、暴行、窃盗、すりなど、いかにここが危険かという資料を見せられ、「常に後ろに気を付けて歩く」、「毎日の通勤順路を変える」「公共の乗り物は使わない」などと(無理な)注意を受けました。悪徳警官も多いようです。通常、日本からの駐在員や領事には運転手付きの車が支給され、社則で外を出歩くことを禁じている会社もあるくらいです。しかし、それでは生活ができないので、地味な服を着て足早に歩き、貧乏なアジア系留学生のふりをしながらバスやメトロを使っています。また、苦勞するといえばロシア語です。街の表示はロシア語ばかりで、英語はほとんど通じません。4か月経過した今になって、ようやく買い物にも慣れてきました。町は薄汚れ(ロシア人はビール瓶などのゴミを平気で道端に捨てます)、バスは古く、錆びつき、配線もむき出しになっています。アパートに住み始めてすぐ、エレベーターが停まり40分間も閉じ込められたこともありました。冬にはマイナス29度の世界を体験しました。

しかし、慣れてしまえば、いずれもどうということはありません。

さまざまな場面で周囲のロシア人に助けられながら生活しています。感謝、感謝の毎日です。教授の奥さんには良いアパートを見つけていただきましたし、困ったことがあれば同僚が親身に聞いてくれます。医局は日本に比べるとかなり狭いですが、わいわいと和やかに仕事をしています。ロシアの職場ではその日初めて会う時と、帰り際の二回、一人一人と握手を交わします。誰かの誕生日があると昼間から皆でケーキを食べ、ウイスキーやコニャックなど強い酒で乾杯します。ウォッカとビールを混ぜたものを「ヨールシュ」と呼びますが、このヨールシュで「白熊を捕まえる」といういかにもロシアらしい飲み方を教えてもらいました。まず、ビールとウォッカをグラスに1対1で注ぎます。その半分を飲んだら、ウォッカを半分注いでグラスを満たします。さらにその半分を飲んだら再びウォッカを注ぐ、と繰り返すことでグラスの中身が白く(透明に)なるまで続けるというものです。反対に「ヒグマ(茶色の熊)を捕まえる」というのがあり、これは茶色になるまでビールを注ぎ続ける、というものです。実際にやると熊の前に大虎が出てきそうです。お世話になったお礼にと、何かイベントがあれば「海苔巻」を作って振舞うことにしています。サーモンを使ったロシア風の



医局での飲み会。このあと不覚にも酔いつぶれてしまいました。

我流ですが、幸い「寿司」好きのロシア人にも好評を博しています。

余暇にはエルミタージュ美術館へ行ったり、近くのホールヘクラシックのコンサートを聴きに行きます。学生証があると美術館は無料、コンサートも400円くらいで楽しめます。老若男女が集まるアットホームな雰囲気の中、本格的なコンサートが聴けるのはサンクトペテルブルグならではかもしれません。

ロシアの長く暗い冬の季節には、うつ病になってしまう駐在員も多いそうですが、お調子者の性格のおかげか無事に乗り切ることができました。今は春の訪れを楽しみにしています。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった土屋教授はじめ、同門の先生方に感謝申し上げます。あと半年、さらにいろいろなことを吸収して、日本で開花させられるよう頑張ります。